

「パウロの祈り」エペソ3章14-21節

今日は新年にあたり、このパウロのささげた祈りを通して、私たち信仰者が新しい年どのようなことを神に祈るべきかを共に学んでみたいと思います。パウロはここで自分のためではなくエペソ教会のクリスチャンたちのために祈りを捧げています。パウロがこのような祈りを捧げる背景には、エペソ教会のクリスチャンたちがパウロの獄中での苦難を見て落胆している者たちがいたからでした。エペソ教会のクリスチャンたちはイエス・キリストを信じる信仰を持ったものの、自分たちの上に降りかかる重い苦難や試練を恐れ、信仰の目をもってそれらを受けとめることができなかつたのです。だからこそパウロはそのような試練や苦難を彼らが正しく前向きに受けとめ、それらを神への信仰によって乗り越えることができるようにとこれらの祈りを捧げているのです。それではパウロはこの御父^{ちち}に対して、彼らのためにどのようなことをここで祈っているのでしょうか。三つの点から見てみたいと思います。

まず第一の祈りは、16節で「内なる人に働く御霊により、力をもってあなたがたを強めて下さいますように。」と祈っています。

私たちイエス・キリストを信じる者の心に御霊が住んで下さり聖霊の宮として下さることは皆さんも知っていると思います。ですから私たちキリストを信じた者の心の内には御霊が住んでおり、御霊なる神さまがすでに働いておられるのです。そこでその内なる人に働く御霊により、力をもってあなたがたを強めてくださいますようにとパウロは祈っているのです。それは、御霊は私たちの信仰生活を支え、励ましてくれる助け主であり、慰め主であるからです。また復活されたイエスが天に昇って行かれる前に、弟子たちに対して「しかし、聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となります。」と、御霊を福音宣教において力を与える方として語っています。私たちの内に内住しておられる御霊こそ試練や苦難の中にある私たちを慰め、励まし、力づけて下さる心強い神だからです。

さて次に第二番目にパウロは17節で「信仰によって、あなたがたの心のうちにキリストを住まわせてくださいますように。」と祈っています。

この「住む」と言う言葉は、ただの一時的な滞在という意味ではなくて「永住する」「定住する」という意味だそうです。ここで大切なことは私たちとキリストとの深い交わりであり、つながりであります。私たちがぶどうの幹であるキリストにしっかりとつながり、留まっているということです。何故なら私たちがキリストに留まっていなければ実を結ぶことができないからです。私たちはキリストを信じ、心の中心にキリストが住まれ、キリストによって支配されることが必要なのであります。そしてこのようにキリストとしっかりと結び合わされているキリスト者はどのような試練や苦難の中にあっても決してキリストから離れるようなことはないのであります。私たちはどのような家族と一緒に住むかによっても、その人の人生や価値観は大きな影響を受けるものです。同じく、私たちはキリストを私たちの心のうちに住ませることによって、当然キリストの影響を大きく受けるようになるのです。そして私たちはキリストの心、キリストの愛を知り、それに従って聖く生きるように変えられていくのです。それはまさに17節で語られているように「私たちがキリストの愛に根ざし、キリストの愛に基礎を置いて生活をするように」なるのです。それではキリストの愛に根ざした生活とはどのような生活でしょうか。それは一言で言って愛を喜ぶ生活であります。そしてこれこそ、パウロの第三番目の祈りにつながっているのであります。

パウロは18節から19節で、「すべての聖徒たちとともに、その広さ、長さ、高さ、深さ

がどれほどであるかを理解する力を持つようになり、人知をはるかに超えたキリストの愛を知ることができますように。」と祈っています。

広さとはどんな罪人たちをも受けとめる差別のない広い愛であります。長さとはどこまで行っても尽きるところがない忍耐の愛であります。高さとは愛の崇高さと言えるかもしれません。深さとはどんな罪人をも愛する愛の深さであります。それではそのようなキリストの愛を私たちはどこに見ることができるでしょうか。パウロは「それは人知をはるかに超えたキリストの愛である。」と語ります。そして私たちはこの「人知をはるかに超えたキリストの愛」をキリストの十字架の中に見ることができます。確かにキリストの十字架において示された父なる神の愛とキリストの愛は私たち人間には到底理解することのできない深いものがあります。それは父なる神と子なる神キリストとがどんなに深い愛の関係、愛の交わりがあったかを誰も知らないからです。父なる神が子なる神キリストを私たちの罪のために捨てるということがどんなに大きな悲しみであり、大きな愛の犠牲であるか誰も理解することができないのです。ましてや子なる神であられるキリストが愛する父なる神から捨てられるということがいかに深い死ぬほどの悲しみであったかをも私たち人間は理解することができないのです。しかしパウロはその「人知をはるかに超えたキリストの愛」を知ることができますようにと祈っているのです。それはこのキリストの十字架に示された愛こそ私たちキリスト者の信仰の本質であり、すべての土台であり、私たちの信仰の始まりだからであります。もしもこのキリストの愛を見失ったならば一切が空しいのです。それは私たちは本当に心からキリストの十字架の愛を知ることなしに人の罪を赦すことができないからです。しかしクリスチャンの中でもそのキリストの愛の受けとめ方、知り方において違いがあります。そしてその違いはまた他の人の罪を赦すことにおいても現れて来るのです。他の人の罪を赦すことのできない人はまだキリストの愛を知っているとは言えないのです。そして実はそのキリストの愛の受けとめ方の違いは自分自身の罪の受けとめ方の違いに最も如実に現れて来るのです。少ししか自分の罪深さを受けとめていない人は少ししかキリストの赦しを、そして愛を感じるすることができないのです。内村鑑三は「私たちの罪に対する浅薄な理解はキリストに関する浅薄な理解しか生み出さない。」と言いました。つまりそのような罪意識の薄い人はキリストへの感謝も薄ければ、キリストへの愛もキリストとの交わりも薄いのです。そしてそのような人は何か試練や苦難が自分の身に降りかかるとすぐにキリストを捨てて、信仰から離れてしまうのです。しかしパウロは御霊によって満たされ、御霊の力によって強められ、キリストを心の中心に住まわせ、人知をはるかに超えたあの十字架の愛を知っていたのでした。だから「私が受けている苦難は、あなたがたの栄光なのです。」と断言することができたのです。それはキリストの福音宣教もまた、様々な苦難と共になされるということを知っていたからです。パウロはこの福音宣教の働きが神の働きであるからといって順風満帆に何の問題もなく進んで行くなんてことを考えていなかったからです。確かに2000年の福音宣教を見る時に、このような様々な苦難を通して福音は宣べ伝えられ、多くの殉教者の血が流される中でキリスト教は世界中に広がってきたのであります。この御霊による強めとキリストを心のうちに住まわせることと、人知をはるかに超えたキリストの愛を知ることとは、私たちが様々な試練や苦難を乗り越えるために最も大切なことなのです。私たちはキリストの愛を知れば知るほど、私たちはキリストの愛に応える生き方がしたいと思うようになるのです。しかし愛することは一人だけで学ぶことはできません。18節にありますように「すべての聖徒たちとともに」とあるように共に教会でキリストの愛を学んでいくのです。

新しい年も様々な試練や苦難の中にあってもキリストの愛をなお深く知り、キリストを心のうちに住まわせ、御霊によって強められ、キリストの愛に生きる者となりたいものです。